群教セ	F09 － 01
	平17.231集

不登校傾向にある生徒への支援体制の充実
――ほっとルーム事業でのボランティア指導員と連携した指導を通して――

特別研修員　　酒井　寛治（前橋市立粕川中学校）

《　研究の概要　》

本研究は、従来の学校関係者によるサポートチームに、「学校を介在としない」指導員を加え、支援体制の強化（ほっとルーム機能）を図りその効果について考察するものである。人間関係づくりにつまずいている生徒に、これまでの「学校」からの支援に「社会」からの支援を加えることによって、心の安定を図ることをねらいとし、その支援体制の強化について取り組んだものである。

キーワード　【教育相談　ほっとルーム　不登校　ボランティア　支援体制】

Ⅰ　主題設定の理由

本校には、中規模の小学校と小規模の小学校、二つの小学校から入学してくる生徒がいる。中学校に入学すると、新しい集団での人間関係づくりがはじまる。近年、「学校に自分の居場所がない」などと訴え、集団における人間関係づくりにつまずく生徒が増加してきており、それを原因とした不登校または不登校傾向にある生徒が増加しつつあり、これは本校の課題にもなっている。これまで、担任を中心に、学年教師、養護教諭、教育相談部会の教師を中心にサポートチームを結成し、これらの生徒の支援を行ってきて、成果も上げているが、さらに充実した支援体制作りを目指す必要があると考えられてきた。

こうした生徒には、人間関係の基礎を作り直させる機会が必要である。そうして、自分に自信をもって人とかかわり合える力を伸ばしてやり、その力を伸ばすことにより、学級などの集団でうまく適応できるように支援していきたい。

そこで、これまでの支援体制をさらにどのような方向で充実させていくかということを考えてきた。人間関係がうまくいかない生徒の大きな原因は「土台」がしっかりしていないという点であると思われる。これは幼少期の「無償の愛」が不足していて、自分が受け入れられたという経験が少ないために自分に自信がもてず、他の人間との距離感がつかめなくなっていることが多い。

人間関係がうまくいかず、不登校傾向にある生徒、特に相談室登校や保健室登校をしている生徒に対して、担任、養護教諭、学年教師などの学校に関係している人物では、その人間関係づくりは、いずれも「学校」を介在して行われる。このことは、不登校傾向にある生徒にとっては、安心と不安の両面性がある。すなわち「学校の先生」という安心感と同時に登校に対してのプレッシャーがかかり、不安な気持ちをもたせるといった具合にである。さらに、今日では、「登校」または「授業に参加する」という気持ちを負担に感じてしまう生徒が多いのと思われる。そうしたことが相談室や保健室に登校しても不安定になりがちな場合が多い原因であるとも考えられる。

このため、「学校」を介在とせず、不安な気持ちをもたないようないわば「社会」の人との人間関係づくりを、不登校傾向にある生徒の働きかけに加えることで、こうした生徒の内在する力をさらに引き出しやすくなると考えられる。このような教職員ではない人（教育機関とも関係のない）を、支援チームに加え、不登校傾向にある生徒の支援にかかわっていただいて、不登校傾向生徒の支援体制を充実させていきたいと考えた。地域と連携し、「社会」からの働きかけをふくめることは、意義が大きくその効果も十分に期待でき、さらに「地域人材の活用」といった観点からも地域の方にボランティア指導員を委嘱し、不登校や不登校傾向にある生徒の支援チームに加わえることにした。学校、家庭、地域で連携し、これまでよりもさらに多角的に支援を行えるような支援体制の充実を目指し、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

地域のボランティア指導員を含めた支援体制の機能をほっとルームと定義し、人間関係づくりをはじめとして、学校のサポートチームとの連携など、不登校傾向にある生徒へのより充実した支援体制の在り方を研究する。

Ⅲ 研究計画（構想・課題解決の方法）

これまでの担任や養護教諭などの「学校」からの支援（図１）とは違った、近所のおじさん、おばさん的な「学校」を介在としないボランティア指導員の支援（図２）を受け、ボランティア指導員との人間関係づくり、信頼関係をもとに「居場所」づくりをし、心身の安定を図り、学級集団に次第に戻していくことが大きな柱である。ボランティア指導員が､生徒の気持ちを受け入れてやり、人間関係や信頼関係を築くことによって、人間関係作りの土台を作り直してやることができれば、そこから自分に自信をもって、ほかの人とかかわれるようになるであろう。さらに、担任を中心とした教職員や学級の生徒などのサポートも得られれば､集団の中での人間関係づくりに自信がもて、心の安定が図れ、学校生活をより充実させて送れるであろう。

図１

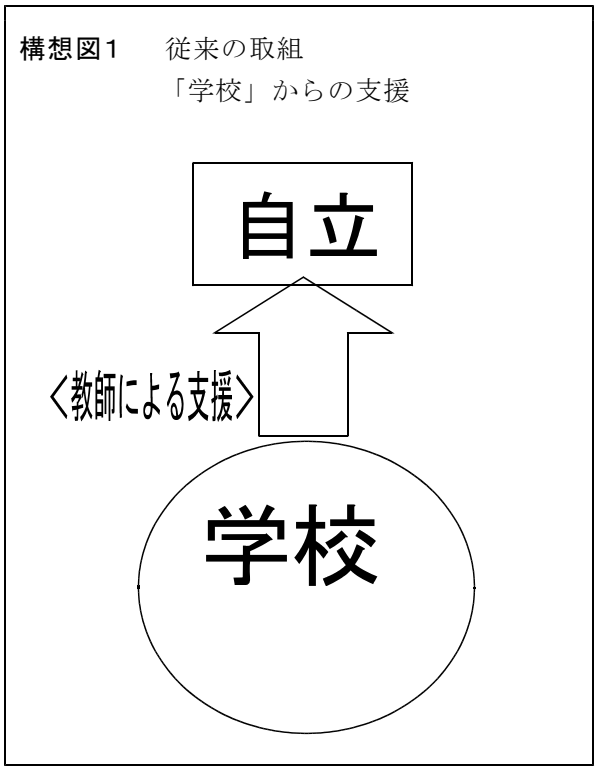
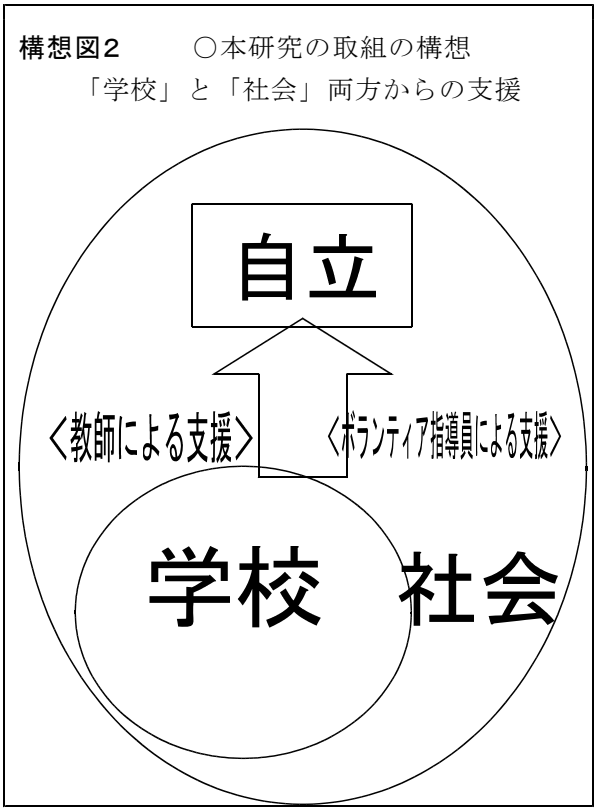


図２



Ⅳ 研究の内容

１　ボランティア指導員について

(1)　ボランティア指導員

本研究のねらいからして、ボランティア指導員に委嘱する条件として、「地域に住んでいる方」「本校のＰＴＡ会員でない方」「学校教育に一定の理解のある方」「時間が自由になる方」「無給で協力してくれる方」などを設定し、委嘱できる方を旧粕川村教育委員会の協力を得て探したところ２名の方が候補に挙がった。２名の方に、不登校傾向にある生徒の実情やボランティア指導員と連携した取り組みについて説明し、委嘱したところ、２名の方とも快く承諾してくれた。２名とも子育てをおえた五十代の女性であり、時間が許すかぎりという形で協力してくれることになり、ボランティア指導員が誕生した。

ボランティア指導員の役割、活動は図３のようである。

(2)　**ボランティア指導員が担当する生徒について**

教育相談部会を中心に検討し、３名の生徒を担当してもらうことにした。

(ｱ)【女子C子】

「学校には自分の居場所がない」と訴え、相談

室登校をしている。給食や行事には、参加できる。

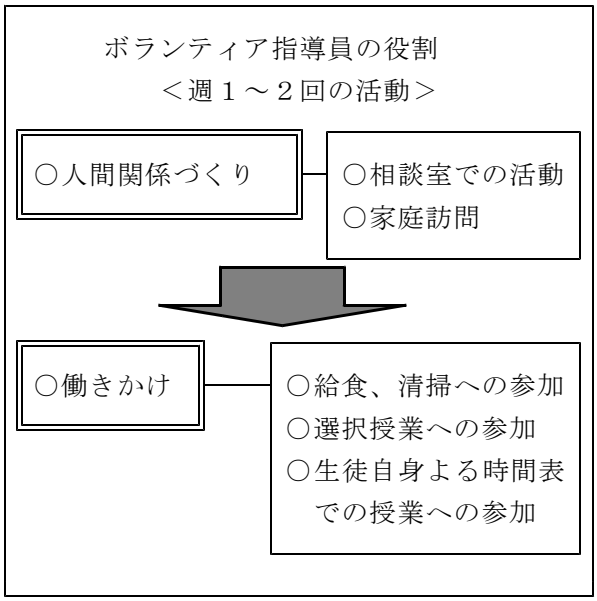
(ｲ)【女子D子】

生活習慣が乱れて、朝起きられず、登校できない。遅刻しながらも登校していたが、欠席が目立っている。

(ｳ)【男子E男】

神経過敏な面があり、下痢気味になってしまい、保健室で過ごすことが多い。１学期から欠席が目立っている。

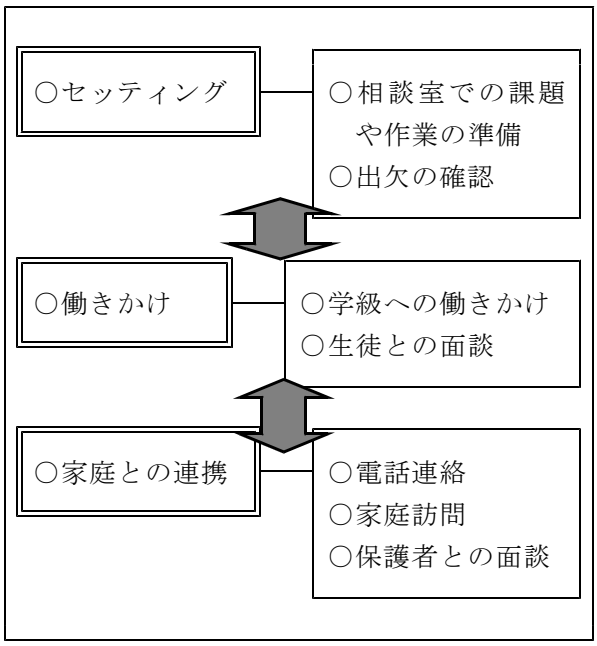
図3



2　校内サポートチームの役割

図４のように、従来の校内サポートチームと同じようにその役割を果たしていくチームである。

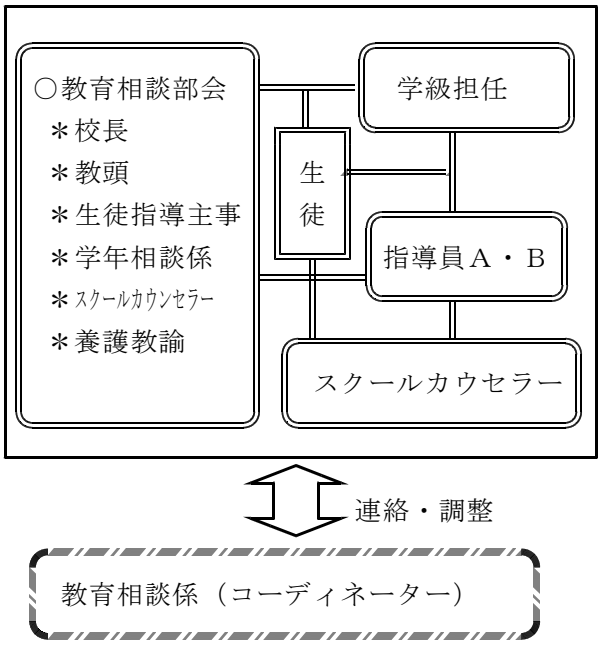
図4



3　校内サポートチームとの連絡・調整

校内サポートチームとボランティア指導員、コーディネーターの関係は、図５のようである。

図5



4　実践

(1)「ふつうの大人」としてのかかわり

【５月】Ｃ子は、指導員Ａがピアノの教師だということを知り、音楽関係のことを中心に会話をし、いろいろな話を聞きたがる。指導員Ａとの交流をごく自然に深めることができた。また、起床時間や食生活などの生活習慣における指導員Ａの忠告にも素直に耳を傾ける。

【５月】朝、起きられずに登校できないＤ子に、指導員Ｂが家庭訪問を開始する。話をするために起きているという約束をし、日常的な会話をし、家庭訪問を終了する。５月から６月にかけて、話の流れから、３回、指導員Ｂと登校することができた。

＜考察＞

学校の教師ではなく、ふつうの大人としてのボランティア指導員との接触は、「学校」を介在とせず、プレッシャーがないためか非常にスムーズに行うことができた。会話も、無理に「学校」関係のことを避ける必要もなく、ごく自然な話題で

行われた。また、ボランティア指導員が、子育てを経験してきている元母親であることも、生徒の心の安定によい影響を及ぼし、生徒とボランティア指導員との人間関づくりがうまく図れていた。このことにより、結果的に「学校」のことについても、生徒が安定した気持ちで受け入れられ、これまで以上に、学校生活について目が向けられるようになった。ボランティア指導員の人柄のおかげもあり、これまでの「学校」の支援に「社会」からの支援を自然な形でしっくりと加えることができた。

(2) 「地域の人」としてのかかわり

【８月】Ｅ男と面談を行っているボランティア指導員の存在を知っていたＥ男の母親から夏休みに指導員ＢにＥ男についての相談がしたいと申し出がある。先輩の母親という立場で、学校の相談室を使って、母親と指導員Ｂで面談を行う。

＜考察＞

これまで、Ｅ男のことについて相談を学校の関係者にしかしたことのなかった母親だが、指導員Ｂを「地域社会の人」「先輩の母親」ということでとらえたとき、あらためて話を聞いてもらい、相談したいと考えたようである。ボランティア指導員も自分の子育ての経験や自分の考えを率直に話し、それは、まさしく地域社会で先輩の母親が若い母親にアドバイスするような自然な形で会話がすすみ、Ｅ男の母親にとっては、貴重な面談となったようである。その後も電話などで、母親と指導員Ｂの交流は続いているようである。これまでの「学校」からの支援に「社会」からの支援を加えることのできた事例となった。

(3) 家庭との連携

【10月】登校できない日が続いているＤ子だが、東京校外学習があり、担任や指導員Ｂの働きかけによって、当日は、母親に送ってもらい、少しだけ遅刻はしたが、参加することができた。

【11月】指導員Ｂの家庭訪問等の働きかけにより、Ｄ子が給食時に登校するようになった。当初は、指導員Ｂが迎えに行って連れてきていたが、母親にバトンタッチして週に２～３回、登校し、相談室で給食を指導員Ｂや教育相談係の教師と食べる。

＜考察＞

これまでは、学校のＤ子への働きかけにあまり協力的でなかったＤ子の母親も、ボランティア指導員の熱心なかかわりによって、次第に自分から、Ｄ子を送ることを申し出たり、スクールカウンセラーとの面談を希望したり、徐々にＤ子に積極的にかかわるようになってきた。これは、これまでとは違う形で、Ｄ子に働きかけを行う「地域社会」の人であるボランティア指導員の支援という刺激が、母親の変容を生んだためであると思われる。これまでの「学校」からの支援では、あまり見られなかった母親の変容を、ボランティア指導員という「社会」からの支援が生みだした事例と言えるであろう。

(4) 指導員の特技を生かした働きかけ

【９月】やや不安定になることが多くなったＣ子は、朝登校を渋り、母親と言い争いになることが多くなった。学校には、１校時の途中くらいに登校することが多かった。生活の波に乗れないＣ子に対して、ボランティア指導員Ａが、「トーンチャイム」という楽器を一緒に演奏して、心を安定させる。体育大会に参加することについての不安を指導員Ａに相談する。体育大会に参加することができた。

【11月】Ｃ子が合唱コンクールが近づいてきて、クラスで歌う歌が歌えないと、大変不安定になる。指導員Ａの合唱についてのアドバイスと励ましによって、前向きな気持ちになる。音楽教師にＣＤを借り、相談室で練習を始める。コンクールに参加し、生き生きと活動することができた。

＜考察＞

偶然ではあるが、指導員Ａがピアノ教師であり、音楽についての専門知識をもっていたことは、もともと音楽が好きなＣ子の学校生活のいろいろな面で良い影響を及ぼした。特に「トーンチャイム」は、指導員Ａの考えで、心の安定のための楽器演奏という目的で行われていたが、不安定になった

Ａ子を安定させるのに役立った。同じ音楽の専門知識を持った「学校」の音楽の教師とは違う音楽を通した働きかけは、大変有効であったと考えられる。こうしたボランティア指導員の特技を、支援の中に加えられたことは、結果として支援体制の強化につながり、ボランティア指導員の有用性を確認することができた。

(5)　教師との連携した働きかけ

【６月】不安定な気持ちから、学校生活で、下痢気味になり頻繁にトイレに行き、保健室に通うＥ男と養護教諭を介して指導員Ｂが面談を行い、働きかけを始める。Ｅ男は、家族関係のこと、学校生活のことをいろいろ話す。受容的に接する指導員Ｂにそれらについての自分のもっている不満を打ち明ける。その後、定期的に面談を行うようになり、面談後のＥ男はこれまでより安定するようになった。

【11月】Ｃ子に土曜日に行われる私立高校の１日体験入学に、指導員ＡがＣ子に、教育相談係がＣ子と仲の良い生徒にすすめ、２人で一緒に行くように働きかける。体験入学に参加し、高校を大変気に入って、進路の第１希望にする。家で、面接や作文の練習をしたり、学習の計画を立てたりし、意欲的になる。授業にも参加することができるようになった。

＜考察＞

学校サポートチームとボランティア指導員を教育相談係の教師が、コーディネートし、様々な形で支援を行ったことが、いろいろな面から働きかけを受ける形となり、有効であった例である。教育相談部会での情報交換から支援の方法を決め、これまでの学校支援に加えて、ボランティア指導員の支援が加わったことによって、生徒の変容を見ることができた。

(6)　適応指導教室との連携した働きかけ

【７月】Ｃ子が、地区に開設された適応指導教室に午後通級することになり、通級するにあたっての学校生活での約束や生活のパターンを指導員Ａと決める。自転車で元気に通級をはじめる。

【９月】Ｃ子が、適応指導教室で通級をはじめた他校の生徒(男子)と清掃の仕方などでトラブルを起こす。「適応指導教室」のことは、自分が一番知っている」と主張し、不安定になる。適応指導教室の指導員と連絡を取りながら、指導員Ａが、Ｃ子の不満を受容してやり、次第に安定して通級できるようになった。

【11月】Ｃ子と適応教室の指導員、教育相談係、指導員Ａとの話合いで、日没も早くなったこと、授業にできるだけ多く参加するという点から、適応教室への通級をやめ、学校で１日を過ごすことにする。自分で予定を決め、１日、２～３時間ではあるが、意欲的に授業に参加する。

＜考察＞

地域に適応教室が設置され、Ｃ子自身が通級したいと考えたことから適応教室の指導員も支援に加わった例である。Ｃ子は、学校のことを適応教室の指導員に、適応教室のことを教育相談係の教師にいろいろ話していたが、ボランティア指導員には、その両方のことを話していた。このことによって、結果的にボランティア指導員が適応教室と学校のコーディネーター役を務めることとなり、適応教室と学校の連携をうまく図ることができた。

Ⅴ　まとめと今後の課題

1　まとめ

(1)　ボランティア指導員の有用性

今年度の実践を通して、不登校傾向又は不登校の生徒に、「学校」を介在としないボランティア指導員との人間関係づくり、信頼関係をもとに「居場所」づくりをし、心身の安定を図るという、これまでとは違った「社会」からの働きかけの有用性が分かった。学校関係者とは違い、心理的な圧迫もあまり感じることなく、いろいろな相談をしたり、活動をしたりすることができ、そのことが学校生活にも大いにプラスとなっている。今後、ボランティア指導員が、学校の意図をくみ取りすぎて、教師の代理という存在にならずに、あくまでも近所の「おじさん、おばさん」という「社会」

の人という立場で指導に当たっていけるように環境をさらに整えていきたい。この「学校」からの支援に「社会」からの支援を加えた不登校生徒の支援体制について、さらに有効な在り方を検討していきたい。

(2)　地域人材の活用について

特色ある学校づくりや地域人材の活用を目標のひとつとしている本校において、本校の学校課題である不登校対策に地域の人材を活用することは、大いに意義のあることである。この取組が継続したものとなるように、さらに地域に協力を求めたり、不登校問題について理解を深めてもらったりしていけるように努力していきたい。

2　今後の課題

(1)　ボランティア指導員の人材の確保

「地域の人材の活用」が不可欠な条件であるが、地域の方ならだれでも良いというわけではない。「学校教育や不登校について一定の理解のある人」、「時間がある程度自由になる人」、できれば「ＰＴＡ会員でない人」など様々な条件があり、しかも無給でお願いするという点で、人材を確保することが難しい。しかし、ボランティア指導員の制度を継続していくために、こうした条件に当てはまり、ボランティア指導員をお願いできる方を探していく努力を日頃から続けていきたい。

(2)　ボランティア指導員の位置づけ

校内での位置づけをさらに明確にする必要がある。特に、校内での事故や家庭訪問時や生徒を学校に連れてくる際の交通事故などについての保障面について、今年度は、ほっとルーム事業でのボランティア保険とボランティア指導員の自動車保険で対応することにしたが、次年度以降、制度をしっかりと確立していく必要がある。

(3)　コーディネーターの必要性

学校サポートチームにコーディネーターが必要であるように学校サポートチームとボランティア指導員、スクールカウンセラーの連絡、調整を行うコーディネーターの存在が不可欠である。ボランティア指導員と連携した支援体制の充実には、情報の交換や管理、人的な配置や場の設定など、学校サポートチームでのコーディネーター役よりさらに多くの機能が求められる。今回の取組では、教育相談係の教師がコーディネーターを務めたが、さらに機能を高めるためには、コーディネーターとして活動するための時間の確保や負担増にならないための配慮など校内体制の見直しも必要である。

(4)　個人情報の管理

ボランティア指導員が担当する不登校傾向にある生徒の成績や家族の状況、経済の状況などの個人情報の管理という点では、ボランティア指導員は、「社会」の人で、教職員とは、また立場が違う。そこで、この点については、さらに「学校」で話し合い、ボランティア指導員との再確認を常にしていくことを実行したり、個人情報保護のためのマニュアルを作成したりして個人情報の管理を徹底していく必要がある。

(5)　地域、家庭とのかかわり

不登校問題での「地域人材活用」は、ともすれば、「学校」が不登校問題に消極的なのではないかという誤解を招き、学校不信につながりかねないという意見もある。そのため、学校と地域全体で、不登校問題に取り組んでいくということ、つまり、「学校」の支援に「社会」の支援を加えていくことの有用性や必要性について理解してもらえるように、情報の発信や理解のための説明を機会をとらえて、継続してしっかり行っていく必要がある。

(6)　ボランティア指導員の負担

ボランティア指導員に、時間的な拘束や心理的なストレスなどの過度な負担をかけることのないようなボランティア指導員の活動の仕方、また学校サポートチームとの連携をさらにしっかり図っていくことや「ボランティア」という位置づけを崩さないように明確にしておくことが、今後も大切である。

(7)　他の学校ボランティアとの連携

本校には、大学生の学力サポートボランティア、地域の伝統芸能や地域ふれあい学習のボランティアも活動しており、それらの学校支援ボランティアとの連携の在り方として、学校支援センターを設立し、さらに組織的に活動をしていくことを検討している。しかし、不登校に生徒の指導にあたるボランティア指導員は、その性格上学校支援センターの組織に組み入れていくべきか、組み入れるとすれば、どのような形で組み入れていくべきか検討する必要がある。

（担当指導主事　井上　淑人）